日中対照言語学会
第 29 回大会（2013 年度春季大会）のご案内

本学会では、下記の要領で２０１３年度春期大会を開催いたします。会員の皆さまには、お誘い合わせのうえ奮ってご参加下さい。また、会員以外の方の参加も歓迎いたします。

記

日　時：２０１３年５月２６日（日）午前９時３０分より午後５時３０分まで

会　場：東洋大学（２号館１６Fスカイホール）**都営三田線白山駅から徒歩5分、メトロ南北線本駒込駅から徒歩5分、JR山手線巣鴨駅から徒歩20分。**

参加費：１０００円（会員、非会員共通）

プ　ロ　グ　ラ　ム

受付（9：30－）　　総合司会　竹島毅（大東文化大学）

大会開催校挨拶　王亜新（東洋大学）　9：40－9：50

開会の辞　横川伸（東洋大学名誉教授）　9：50－10：00

研究発表１．無対自動詞の意味的特徴について　10：00－10：35
汪然（北京大学博士後期課程）

研究発表 2．条件接続表現の日中対照“一ｐ，就ｑ”を中心に　10：35－11：10
馬一川（北京外国語大学博士後期課程）　以上司会安本真弓（高千穂大学）

休憩（10 分：11：10－11：20）

研究発表 3．日本語の「名詞＋助詞」と中国語の“介词+名词”の対応関係
劉志偉（首都大学東京）　11：20－11：55

研究発表 4．疑問表現形式としてのノデハナイカ　11：55－12：30
戴宝玉（上海外国語大学）　以上司会　加藤晴子（東京外国語大学）

昼休み（60 分　近くにレストランあり、昼食は受付にての注文も可）　12：30－13：30

講演．　対人関係の言語学－社会文化的な視点から対照研究にアプローチする－
三宅和子（東洋大学）　13：30－14：30

研究発表 5．日中両言語における受身表現の表す意味体系　14：30－15：05
高橋弥守彦（大東文化大学）　以上司会　山口直人（大東文化大学）

休憩（15 分：15：05－15：20）

研究発表 6.“有着”構文について　15：20－15：55
白愛仙（明星大学　非常勤）

研究発表 7.「Ｖ＋着」と＜Ｖ＋テイル＞について　15：55－16：20
時衛国（愛知教育大学）

研究発表 8．日本語の「～タコトガアル」と中国語の“Ｖ过”　16：20－16：55
王学群（東洋大学）　以上司会　続三義（東洋大学）

総会　平山邦彦（拓殖大学）　16：45－17：15

閉会の辞　鈴木義輝（早稲田大学）　17：15－17：30

※入会申し込み、学会開催当日に学会費の納入も受け付けます。（年会費：社会人 4000 円、院生 2000 円）

講演

テーマ：**対人関係の言語学－社会文化的な視点から対照研究にアプローチする－**

氏名：氏名：三宅和子（みやけ　かずこ）

所属：氏名：東洋大学

要旨：言語使用と社会との関係を解明する社会言語学の研究においては、言語現象の把握のみならず、その言語の使い手が対人関係や社会をどのように捉えているかを究明することが重要である。言語使用には個人間の相違、地方差や階級差など様々な異なりがあるものの、繰り返し使われるフレーズやことばづかいの中に、その言語社会全体の中で共有される志向性を捉えることができる。この社会文化的志向性と言語との関連を視野に入れた考察は、日本語と中国語の対照研究にも有益な分析的視座を提供するものであると考える。例えば、日本語のデータを整理する中で浮かび上がる「ウチ・ソト・ヨソ」意識は、日本語話者の対人関係の把握の仕方や世界観を色濃く反映している。「いつも気配りをして丁寧な日本語話者が、なぜ場合によっては失礼であったり人のことをかまわなくなったりするのか」という非母語話者の素朴な疑問からは、「欺瞞的」な日本人像を形成されやすい。感謝するときにも「すみません」を連発する日本語話者が、人と突き当たっても「すみません」もいわない例なども、同様の言語行動にみえるが、「ウチ・ソト・ヨソ」意識を考察の視点に取り入れると説明がつく。この他、「場」の意識、「共振」志向などのキーワードを通して、言語現象と対人関係把握の社会文化的志向性を解き明かしたい。

研究発表

１．テーマ：無対自動詞の意味的特徴について

氏名：　汪然（おう　ぜん）

所属：北京大学博士後期課程

キーワード：自動詞、有対、無対、転化、派生

問題提起：日本語の自動詞は、対応する他動詞があるかどうかという点で三つの類に分けられる。一つは、「開く」「掛かる」「下がる」のように、対応する他動詞（「開ける」「掛ける」「下げる」）のある自動詞であり、もう一つは「開（ひら）く」「閉じる」のように、自他両方に兼用される両用動詞であって、さらにもう一つは「ある」「歩く」「死ぬ」のように、対応する他動詞のない自動詞である。本稿では、一番目のものに対して「有対自動詞」、二番目のものに対して「両用動詞」、三番目のものに対して「無対自動詞」という用語を用いる。奥津敬一郎（1967）では、自他対応の派生関係は三種類があると指摘している。（ⅰ）自動詞から他動詞への転化。（ⅱ）他動詞から自動詞への転化。（ⅲ）或る共通要素から自動詞および他動詞への転化。本稿は、自他の派生関係を重んじて、自動詞の意味的特徴を考察していきたい。具体的に言えば、自動詞の意味的な特徴を考察を通して、有対自動詞と無対自動詞とには各々を特徴づける相違があることを示そうとするものである。

２．テーマ:条件接続表現の日中対照“一ｐ，就ｑ”、“只要ｐ，就ｑ”、“如果ｐ，就ｑ”、“既然ｐ，就ｑ”構文を中心に

氏名:馬一川（ば　いっせん）
所属：北京外国語大学博士後期課程

要旨:「ト」「タラ」「レバ」「ナラ」を用いた日本語の仮定条件文は、通常、中国語の条件複文・仮定複文・推断複文の三つの複文類型に対応される。本研究は、『日中対訳コーパス』を利用し、日本語に対応する場合、中国語の“一ｐ，就ｑ”、“只要ｐ，就ｑ”、“如果ｐ，就ｑ”、“既然ｐ，就ｑ”構文が多く使用されることが判明した。また、本研究を通して、以下の二点が明らかになった。

① 日本語は一つの接続表現で複文の接続関係を表すのに対し、中国語は従属節関連詞と主節関連詞の二つの接続表現と、その動的な組み合わせで接続関係を表す。そのうち、従属節関連詞は全体文の複文類型と主節関連詞の使用を規定する機能を持つ。

②「ト」「タラ」「レバ」「ナラ」は、すべて“只要ｐ，就ｑ”と“如果ｐ，就ｑ”構文に対応されうるのに対し、「ト」は“既然ｐ，就ｑ”構文、「ナラ」は“一ｐ，就ｑ”構文に対応されることが見られない。これは“一ｐ，就ｑ”構文の持つ時間性特徴、“既然ｐ，就ｑ”構文が、従属節事態を事実として提示する特徴に原因があると思われる。そこで、同じく条件複文である“一ｐ，就ｑ”と“只要ｐ，就ｑ”構文を区別し、中国語複文の関連性を解明することで、日本語の接続表現に含まれる複雑な意味と機能をより系統的に説明することができると考えられる。

３．日本語の「名詞＋助詞」と中国語の“介词+名词”の対応関係

氏名：劉　志偉（りゅう　しい）
所属：首都大学東京　人文科学研究科　日本語教育学分野

要旨:「どこに住んでいるの？」のように、中国語訳には“你在哪儿住?”と“你住在哪儿?”の二通りの言い方が存在する。「どこ＋に」に相当する“在＋哪儿”は中国語では動詞の前にも後ろにも現れる。前者の“在”は介詞とされるのに対し、後者のそれは動詞の“住”と一括して動補構造として位置づけられるのが一般的である。“在”が動詞の前後に現れる位置によって異なる説明が施されることは日本語母語話者にとってわかりにくいと言わざるを得ない。

また、中国語教育文法では“小王站在我面前。”（劉 2001:544）が結果補語として区分されるのに対して、“鲁迅一八八一年生于绍兴。”（劉 2001:626）は介詞補語と分類されている。言い換えれば、日本語の「王さんが私の目の前に立っている」の「に」と「魯迅は1881年紹興に生まれた」の「に」の中国語訳は、前者は結果補語であるのに対し、後者は介詞補語として解されているのである。このような説明は無論中国語の特徴に即した点も認められるが、同じく「(場所) 名詞＋に」の形をとっていながら、異なる補語に区分されると

いう説明はやはり日本語母語話者にとって理解しがたい面があろう。
　本発表は、(1)日本語の「名詞＋助詞」と中国語の“介词+名词”の多くが対応していること、(2)従来の説（劉 2001:626）において言及された“于”“向”“自”といったごく限られた一部の“介词”のみならず、動詞に後続する“介词+名词”形式をすべて“介词补语”と見なして捉えられること、の２点から日本語の「名詞＋助詞」と中国語の“介词+名词”をそれぞれ一つのまとまりとし、その対応関係を体系的に示すことにより、日本語母語話者を対象とする中国語教育に寄与できることを目指す。

４．テーマ:**疑問表現形式としてのノデ**
氏名：戴　宝玉（だい　ほうぎょく）
所属:上海外国語大学
要旨：本稿は、まずノダの本質は、先行文と後続文の関連性にあると考え、先行文は、事実の客観的描写、後続文は、その事実をもとに行う推論の結果ということから、先行文を一次情報、後続文を二次情報を表すとした。そして「ところをみると」という表現を、一次情報を示す標識と考え、その標識が現れた場合の二次情報に与る文末形式を、収集した用例にもとづき、ノダ系、ラシイ系と無標識系の三種類に分類した。
　次にノダの一バリアントとしてのノデハナイカをとりあげ、その疑問表現としての、ダロウとの混同を指摘し、同じ推量にも情報の次元による違いがある、とした。また、一次情報の二次情報への拘束力の弱体化によってノデハナイカがその機能が拡大し、しだいに婉曲表現へと移行していく事実を指摘し、その実際の使用例をあげながら分析を行った。この分析を通して、ノダの本質は、関連づけ性にあることを確認し、ノダがさまざまな意味に解釈されるのは、主として、その一次情報からの拘束力の弱体化に起因し、その弱体化の程度・様相によってさまざまな意味・機能が生じたことにも触れてみた。

５．テーマ:**日中両言語における受身表現の表す意味体系について**
氏名:高橋弥守彦（たかはし　やすひこ）
所属:大東文化大学
要旨:本発表では日中両言語における受身表現の表す被害義・受益義・中立義３類の文意を何故表せるのかについての体系性を検討する。
　中国語の受身表現は、先行研究により被害義・受益義・中立義の３類の意味を表すと言われている。一般に言われるように、受身表現は筆者の調査によっても被害義を表す場合が一番多い。本発表では、言語事実に基づき、以下の数点について検討する。
ⅰ．受身表現はなぜ被害義を表す場合が一番多く、その反義語である受益義をなぜ表せるのかと、なぜ損益に関係のない中立義まで表せるのかについて検討し、受身表現の体系性を検討する。
ⅱ．受身表現が被害義・受益義・中立義の３類を表すと断定してよいのかについて検討する。
ⅲ．日本語についても、これら３類の意味を表せるのかを検討し、やはりその体系性を検討する。

ⅳ．日本人はなぜ受身文を多く使う傾向にあり、中国人はあまり使わない傾向にあるかについて検討する。

６．テーマ：“有着”構文について
氏名：白愛仙（はく　あいせん）
所属:大東文化大学　非常勤
要旨：“有着”構文は助詞“着”を伴うことにより、“有”構文に比べ、意味的・構造的な制限が見られる。“有着”構文は存在、所有、関係などの意味を示している。存在や所有を表す“有着”構文における目的語は特徴や状況を意味する修飾語や連語を伴う傾向があり、関係を表す“有着”構文における目的語は特徴を意味する修飾語や連語を伴う傾向がある。所有を表す“有着”構文における主語と目的語の所有関係には介詞連語が関与される場合がある。一方、関係を表す“有着”構文における目的語は主語と介詞連語の繋がり関係や影響関係を示す傾向がある。所有を表す“有着”は“很、非常”のような程度副詞を伴うことが可能であるが、関係を表す“有着”は“很、非常”のような程度副詞を伴うことが不可能である。本論は主に存在、所有、関係を表す“有着”構文の構造的な特徴を分析する。

７．テーマ：「Ｖ＋着」と＜Ｖ＋テイル＞について
氏名：時衛国（じ　えいこく）
所属:(愛知教育大学)
要旨：「着」と＜テイル＞は、「跑/走る」「飞/飛ぶ」「下(雨)/(雨が)降る」などのような動詞をそれぞれ捉え、動作の進行を表わすことができるという点で大体共通している。「着」は「死(si/死ぬ)」という動詞を捉えることができないが、「忙(mang/忙しい)」という形容詞を捉えることができる。それに対し、＜テイル＞は「死(si/死ぬ)」に対応すると見られる＜死ぬ＞という動詞を捉えることができるが、「忙(mang/忙しい)」に対応すると見られる＜忙しい＞という形容詞を捉えることができない。本研究では「着」と＜テイル＞は、どのような共通点と相違点があるのか、それぞれどのような意味機能や文法的特徴があるのかについて、動詞を捉える場合を中心に、その意味と用法について考察することとする。
「着」と＜テイル＞についてはすでに多くの成果があげられ、優れた研究が蓄積されているが、ただ対照研究はまだ少ないようである。本研究はこれまでの先行研究を踏まえながら、動的状態の持続、持続の時間範囲、運動過程の各局面及び静的状態の持続などを表わす場合のその意味・用法について、対照研究の立場から検討を加え、その共通点と相違点を明らかにする。

８．テーマ：日本語の「～タコトガアル」と中国語の“Ｖ过”
氏名：王学群（おう　がくぐん）
所属: 東洋大学
要旨:日本語の「～タコトガアル」と中国語の“Ｖ过”は対応する場合が多くあるが、対応しない場合も少なくない。今までの研究ではそれがかなり明らかにされているが、時間構

造という観点からまだ少ない。特に両者の異同についての理由づけにおいてはまだ十分とは言えない。それで、本稿では時間構造という観点に立ち、両者の異同に焦点を当て、なぜそういう異動が存在するのかを明らかにしたいと考えている。

考察にあたり、まず先行研究を参考に、日本語の「～タコトガアル」、中国語の“Ｖ过”の意味用法を整理したうえで、両者の異同を分析し、明らかにする。